


26期生の皆様ー6

中間試験お疲れ様でした。ちょっと緊張が解けたところで、久しぶりに通信を書きます。しばらくお休みしたのは書きたかったけどアイデアがまとまらなかったからです。本当は続けて哲学の説明をしたいのですが、このテーマはかなり難しいのでしばらく中断させてもらいます。その代わりに、先日話したキリスト教について、基本的なことを書いておきたいと思います。

何年前「宗教がわかれば世界が見える」という本が話題になったことがあります。日本では世界において宗教がもつ重要性がいまいち理解されていない、そのままでは世界を理解できないという言い分です。その通りだと思います。いくらかの例を挙げましょう。

2005年4月にローマ教皇ヨハネ・パウロ2世がなくなったとき、その葬儀には二百カ国以上の指導者が参列し、その中には、イランやシリアの大統領も、また宗教の違う人達も大勢いました。式自体には30万人が参加し、教皇の死後を受けて世界各地からローマにやってきた人の数は五百万人に上ると言われます。ともかく葬儀の参列者のリストを見ると驚きま
す（ウィキペディア、「ヨハネ・パウロ2世」を参照）。例えば、アナン国連事務総長、合衆国のブッシュ大統領、イギリスのチャールズ皇太子とブレア首相、ドイツ首相、フランスのシラク大統領、南アフリカのネルソン・マンデラ元大統領などの名前が見られます。では日本からは誰が出たと思いますか。小泉首相ではなく、大臣でもなく、首相補佐官（もと外務大臣）でした。これほど世界のトップクラスが集まる機会なんてめったにありませんから、もしその場に首相が行っていたら、よい外交ができたのにと残念に思いました。

かつてソ連の独裁者スターリン（共産主義の思想に従って宗教を根絶やしにしようとした）が、ローマ教皇には注意しないといけないと言われたとき「教皇はどれくらいの軍隊を持っているのか」と尋ねたそうです。国や人を計るのに軍事力や経済力だけで判断するのは唯物論者なら当然のことでしょうが・・・。日本はさすがにそういう評価はしなかった。第二次世界大戦の末期に秘密裏に連合軍側と終戦の交渉をしようとして、バチカンに頼ろうと考えた政府の人もいたそうですから（しかし結局ソ連に頼り大失敗した。日本政府が海外の情報を仕入れることが下手で、反対に国内の秘密を外国のスパイに知られまくりというのは昔も今もあまり変わっていないようです）。ただヨハネ・パウロ2世の葬儀のときは、この教皇が世界でどれほどの評価を受けていたかを見誤ったと思います。海外、特に欧米でローマ教皇が権威を持っていることは、1994年にはヨハネ・パウロ2世が、2013年には現教皇フランシスコが合衆国の雑誌『タイム』の **man of the year** に選ばれたということでもわかるでしょう。

日本と欧米での宗教についての感覚の違いを示す例をもう少し紹介しましょう。江戸幕府がキリシタン迫害のための手段として踏み絵という制度を取り入れたことはよく知られていますが、この制度が欧米でどれほどの嫌悪感を持って見られたかは私達は知りません。『ガリバー旅行記』を書いたイギリス人のスウィフト（1745年没）は、小説の中でガリバーを日本まで行かせ、絵踏をしてまで日本貿易の利に執着するオランダ人を風刺しています。オランダ人も絵踏をしているという噂にはオランダ人自身とても恥じていて、なんとかそれを否定しようと躍起になっていたそうです（片岡弥吉、『踏み絵』91頁）。

幕末に日米通商条約を結ぶために来日したハリスは、条約締結の一年前にこう言っています。「私がもし日本との条約に成功するならば、私は日本在留アメリカ人が信教の自由を完全に行使し、また教会を建てる権利を持てるように要求するつもりだ。また十字架踏みのしきたりも廃止するよう断固として要求したい。オランダ人は250年もの間、卑怯にもそれに何の抗議もしないで見過ごしてきた」と。日本では通商条約だから、商売の話しだけだったと思われがちですが、宗教もことも重要な議題だったということです。ハリスとオランダ人出島の館長クルチウスという人が踏み絵に抗議して、とうとう1857年にこの制度が廃止になりました。

明治維新の直後、岩倉具視を筆頭とする視察団が欧米列強を訪問したことはみんなもよく知っているでしょう。目的は不平等条約の改正でした。しかし、この訪問団が行く先々でキリシタン迫害を非難されたことは知っていますか。最初に着いたアメリカではグラント大統領から「信仰のために国民を迫害しているような国とは対等の条約は結べない」と言われ（似たような事を今の中国にも言えますね）、次にイギリスではヴィクトリア女王から、またデンマークの国王からも非難を受けたのです。岩倉たちは「なんでアメリカの大統領が日本のど田舎の貧しい農民のことなんか問題にすんねん」と舌打ちしたかも知れません（実は、1865年に浦上の信者が「発見」され、またぞろ厳しい迫害が始まった際に、欧米の大使たちから抗議の声が上がっていました）。

天正遣欧使節が当時の南欧世界でどれほどの歓待を受けたかについても言えます。地方の大名の子弟たちは、マドリッドでは「太陽の沈むことのない帝国」の首長スペインのフィリペ2世（1598年没）、ローマではグレゴリウス暦を作った教皇から、その他行く先々の都市でも大歓迎を受けたのです。この事実も日本ではあまり知られていないと思います。



このような事実が中高の日本史の教科書には出てこないこと

とは、日本では宗教問題があまり大した重要性を持たないと一般に考えられていることも一因ではないでしょうか。つまり、宗教とは私的なことで、政治や経済や軍事とは違って社会を動かす力はなく、それゆえ公の場所で話すことではなく、ましてや国家間の問題になるはずがないという考えです。

私が言いたいのは、日本ではそうであっても外国ではそうではないということです。今グローバル化ということが叫ばれています。実際、もう日本の国内だけに閉じこもって暮らしてけるという時代ではない。確かにグローバル化や国際化のために英会話ができないといけませんが、それと同時に世界を知り、しっかりしたものを見方を身につける必要があります。でないと、世界の舞台上で「なんやこいつは、空気の読めへん奴や」と響きを買ったり、「何も知らん無知な奴や」とさげすまれたりするなんてことになるかも知れません。特に欧米との関係を念頭に置くなら世界史とキリスト教と西洋哲学の知識は非常に役に立ちます。もちろん、キリスト教の知識は、単に社会生活や職業上の利益といった現世利己的なことより、よりよく生きるために興味を持って欲しいのですが。

そこで、この秋からこういうプリントの形でキリスト教の基本的な知識を紹介したいと思います。精道を卒業しながら、キリスト教に関して無知だったということになったら、私の責任も少なくなないので・・・。